



Title	＜書評＞エピクロス（朴一功・和田利博訳）『自然について他』
Author(s)	内山，志保；中村，早希
Citation	共生学ジャーナル. 2026, 10, p. 173-181
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

エピクロス（朴一功・和田利博訳）

『自然について他』

京都大学学術出版会、2025 年 4 月、528 頁。

内山志保* 中村早希†

1. はじめに

本書は、近代になって発見された「自然について」の日本語初訳出を含む、「現在、われわれがエピクロスについて知りうる一次資料のすべて」(p.383)⁽¹⁾およびその解説の書である。エピクロスといえばよく知られるのは原子論と快樂主義であるが、訳者の一人である朴氏によると、原子論は心の非物質性の否定につながり、また快樂は人生の目的にはなりえないという理由で、その哲学はしばしば批判にさらされてきたという (p.384)。「快樂主義の哲学」を論じた澁澤(1993)が、幸福は持続的なもの、快樂は瞬間的なものという区別を試みたように、確かに「快樂」という言葉には刹那的あるいは享樂的な意味が伴いがちである。しかし、朴氏によれば古代におけるエピクロスの重要性は、アリストテレスやプラトンよりもまさっていたかもしれないという (p.386)。

評者らの専門分野は集団における人間の心理や行動を研究対象とするグループ・ダイナミックスである。哲学が専門ではない評者らは、本書が有しているエピクロス研究上の重要性を十分理解しているわけではない。一方で評者らが本書を非常に興味深く読んだ理由は、本書を通して人々の中で生きたエピクロスの人物像が生き生きと浮かび上がってきたからである。評者らは、「快樂とは何か」という問いの追究そのものよりも、それが人々の中でどのように使用されるかに関心が向く。充実した一次資料に加えて、既往研究に基づく丁寧な注釈と解説が付けられていることによって、時空を超えて 1 人の生きた人間としてのエピクロスが立ち上がってくるところに本書の面白みがあった。

* 人間科学研究科博士後期課程；u551524g@ecs.osaka-u.ac.jp.

† 人間科学研究科博士前期課程；u426796d@ecs.osaka-u.ac.jp.

評者らと本書との出会いはゼミでの読書会であった。したがって本稿は読書会に参加した 2 名の共著としている。第 2 章では、本書の内容と構成について概略を示す。第 3 章、第 4 章は、評者らの独自の着眼点に基づいた感想も交えながら、本書の魅力を伝えることを目的としている。最後に第 5 章で、現代においてエピクロスを読むことの意義を述べる。

2. 本書の概略

まず本書の概略を紹介する。まず、「エピクロスよりヘロドトスへ、ごきげんよう」で始まるヘロドトス宛の手紙に続き、ピュトクレス、メノイケウスというエピクロスの親しい弟子 3 人に宛てた手紙が収録される。ヘロドトス宛の手紙では、「学説全体の本性について要約された最も重要な内容」(p.48) とエピクロス自身が記しているように、エピクロスの思想の概略が示されている。ピュトクレス宛の手紙は、ピュトクレスからの要望に応じてエピクロスが書いた「天界の事象」についての解説で、「万有」、「世界」、「メタコスミオン」などの独特の用語が登場する。メノイケウス宛の手紙では、人間の幸福と死についてのエピクロスの考えが示されている。

次に収録されているのが、「エピクロスの生涯」と題された文章である。これは紀元後 3 世紀の伝記作家ディオゲネス・ラエルティオスによる 10 巻からなる「哲学者列伝」の最終巻として書かれたものである。朴氏によると、「哲学者列伝」のほとんどの巻が 1 冊で複数の哲学者を扱っているのに対し、1 冊に 1 人の人物があてられているのは 3 巻のプラトンと、10 巻のエピクロスのみであるという (p.386)。

次に収録されているのが、40 か条からなる「主要教説」である。エピクロスは極めて多作であったにも関わらず、現在まで伝えられている書物はごくわずかで、ほぼ完全な形で伝えられているものは冒頭の 3 つの手紙とこの「主要教説」だけであるという (p.382)。本書では訳注によって、「主要教説」と手紙との対応関係を確認することもできる。

次に収録されているのが、19 世紀になってからヴァチカン図書館で発見された「エピクロスの勧告」と題された 81 の断片からなる短い警句集である。これは「ヴァチカン箴言集」と呼ばれているもので、すべてがエピクロ

スのものではなく、弟子たちの言葉も含まれているとされるが、エピクロスの倫理観がよく現れた文書となっている。

次の「エピクロス断片集」は、後代の引用や言及によって間接的に伝えられるエピクロスの言葉を集めたものである。本書では、伝聞的なものや創作的なものを除いて真にエピクロスの言葉であると判断されている 87 の断片が訳出されている。また、作者をめぐる論争があったという 2 つの「母への手紙」も、「エピクロス以外の書き手を想定することは困難であろう」

(p.223) として収録されている。その内容は、息子としてのエピクロスが垣間見られる新鮮さがある。

最後に収録されているのが、本書のタイトルになっている「自然について」である。「自然について」は、37 巻からなる秩序だった講義録で、「3 つの手紙の基礎になっているもの」(p.404) である。本書には日本語初訳出を含む、第 1 巻、2 巻、10 巻、11 巻、12 巻、13 巻、14 巻、15 巻、25 巻、28 巻、32 巻、34 巻であるが、このうち、近年、断続的に復元された「パピルス文書」と呼ばれているものが、2 巻、10 巻、11 巻、14 巻、15 巻、25 巻、28 巻、34 巻である。パピルス文書とは、後 79 年に起きたヴェズーヴィオ火山の噴火でポンペイと共に埋もれたナポリ南東の都市ヘルクラネウムで 19 世紀初頭に発見されたものである (p.406)。朴氏は、3 つの手紙を基礎にしながら、不完全な断片や後代の資料を適宜参照することが、エピクロスの哲学に迫る上での「健全な方法」(p.413) であるとしている。

以上の資料の後に付されているのが 108 頁におよぶ豊富な解説である。当然、非常にわかりやすいこの解説を先に読んだ方が一次資料は読みやすい。しかし、評者らはまずはエピクロス自身の言葉を先に読むことを強くお勧めする。はじめに 3 つの手紙をエピクロスの弟子になったような気持ちで読み進め、伝記から人物像を想像し、短い警句や言葉の断片の意味をかみしめるといふ、本書の構成そのままが、先入観なくエピクロスの存在感を感じられる最善の順序であるように思う。以下では、評者らが本書を通して得た気づきを記述していく。

3. エピクロスの「生と死」

評者が本書を読み進める中で思い浮かんだのは、山本常朝の口述書である『葉隠』であった。「隠れて生きよ」というエピクロスの信条を表すように、ラファエロの「アテナイの学堂」で、葉っぱをかぶって隠れたように描かれているエピクロスと、『葉隠』の書名の呼応は面白い偶然ではあるが、連想の理由はそれではない。三島由紀夫が『葉隠入門』でエピクロスを引用していることはどれぐらい知られているのだろうか。評者は本稿執筆にあたって調べるまでそれを知らなかった。しかし、三島が『葉隠』の中にエピクロスをみたのと同じようど逆の経路で、評者はエピクロスの中にやはり『葉隠』をみた。

三島(1983)は、『『武士道といふは、死ぬ事と見付けたり』というその一句自体が、この本全体を象徴する逆説』であるとし、実は『葉隠』は「死と生とを楯の両面に持った生ける哲学」であると論じている。エピクロスの哲学もまた、「生」について語りながら、それと表裏一体となる「死」についての哲学でもある。それが最もよく表れているのは、「メノイケウス宛の手紙」である。たとえば評者が『葉隠』を想起した一文を取り出せば、「美しく生きることと美しく死ぬことの練習は同じ」といった言葉にそれが現れている。また三島は、「エピクロスの哲理は享楽主義（エピキュリアニズム）と名づけられるが、じつは、ストイシズムと紙一重であった。」とする一方で、山本常朝が、「悪しく聞いては害になる」ために若い人には語らなかったという「奥の手」としての、「人間一生誠に纔のことなり。好いた事をして暮すべきなり。」というような言葉の中に「エピキュリアニズム」を見出している。

一方で、両者が大きく異なる点もある。それは自分の死がどのように解釈されるかということに対する考え方である。山本常朝が「二つ二つの場」で死を選択する理由は武士としての恥を避けるためであったのに対して、エピクロスにはそのような憂慮はない。エピクロスの死への向き合い方は、「死は、われわれにとって何ものでもない」という一句に表されている。

朴氏はまさにこの一語に示されるエピクロス死生観に、ある種の矛盾があることを解説の中で論じている。朴氏が指摘するのは、エピクロスが「死

は、われわれにとって何ものでもない」という主張する一方で、生を肯定することの間にある矛盾である。「生きることが『好ましい』のであれば、なぜ、死は『何ものでもない』と言われるのであろうか。死によって、『好ましい』はずの人生が絶たれるではないか。」(p.458)と疑問をなげかける。エピクロスの主張は、「われわれが存在しているとき、死はいまだ存在せず、死が現に存在するとき、その時、われわれは存在していない」(p.90)というものであるが、朴氏は死への恐れは事前に予期されるものであり、われわれが存在しないというまさにその事態を予期することこそ、われわれを苦しめるのではないかと反論する。朴氏によると、エピクロスに対するこのような疑問は古代から提出されてきたもので、「論理的には、彼の死生観がはらむ矛盾は解消しがたい」(p.468)としている。

では、エピクロスはこの矛盾をどのように乗り越えていたのだろうか。それこそが、「友情」なのである。朴氏は、矛盾を解消するためには、「不死なる善」としての友情が不可欠であつたのだらうと結論付けている(p.472)。再び『葉隠』との比較をすれば、1人の人間の生を超越したものを見出しているからこそ、死が何ものでもなくなるのである。朴氏はエピクロスの快樂主義の到達点を、死の間際に身体的苦痛に苛まれながら達成される幸福感として理解している(p.454)。

「エピクロスの生涯」には、師を「クラゲ」と呼んで反発する若き血気盛んなエピクロス、毎月20日に哲学仲間たちと集うエピクロスが登場する。また、彼に敵対したストア派や、エピクロスの元を去った元弟子による、真偽不明の「悪口」が豊富に残されていることも興味深い。エピクロスが生れたのはサモス島であるが、アレクサンドロス大王の死によって、サモス島からアテナイ人が追放されたために、その後はサモス島に戻ることなく、いくつかの地を転々としている。その中で多くの弟子たちと出会いながら哲学の道を切り開いていくエピクロスの姿は、「隠れて生きよ」という言葉から連想される隠者の印象は微塵もなく、愛されたり、憎まれたりしながら、並外れた人間性をもって人々と共に生きたエピクロスが生き生きと浮かび上がってくるのである。

4. エピクロスの自然

本書ではエピクロスの生涯やその人柄が浮かび上がってくる一方で、その題名にもなっている「自然について」の文章を明瞭に理解することは困難である。朴氏の解説によると、「エピクロスにとって「自然」とはあらゆる存在、すなわち宇宙万有のすべてを指し示す言葉である」とある。そこには我々人間や魂、光、音声言語なども含まれており、「自然」とは、我々が通常イメージする木々や川、虫や動物などの限定的なものではなく、広大な範囲を示していることが分かる。また、37 巻からなると伝えられている「自然について」全体の構成をみると、第 1 巻から第 5 巻までは万物の構成原理や感覚について、第 6 巻から第 9 巻までは魂について、第 10 巻から第 13 巻までは物体や時間、天地の事象や人間の幸福について記されている。それ以降はほとんどが欠落しているが、ミトレス派などほかの主義の哲学について、また行為や夢といった具体的な事柄について書かれているとされている。そのうち断片が現存している計 8 巻は全体の 4 分の 1 未満であり、やはり残された書物からエピクロスのいう自然を完全に明らかにすることは非常に困難である。

そこで、朴氏が「健全な方法」と示すように、哲学の基本原理及び自然学を扱った「ヘロドトス宛の手紙」を参照すると、そこで重要な概念として提示されているのが「先取観念」である。朴氏の解説によると、先取観念とは「生まれ育つなかで、見たり聞いたりする感覚を通じて、身近な人たちから教えられ、記憶され、身についていく最も基礎的な観念」(p.417) だという。そしてエピクロスは、ものごとを判断する際にこの先取観念と常に照らし合わせる必要があると説く。このようにエピクロスが説く自然とは、現代の科学のように自然そのもののあり方を明らかにするというよりも、それにより自らがどのような生き方をするのかという指針として機能しているように思われる。エピクロスは原子の最小単位に関して「最小の混じりけのないものは、目に見えないものを理性によって考察する場合に、より大きなものや小さなものに対して、大きさを測る尺度を自分自身から最初に提供する限界点であると見なさなければならない」と言っているが、ここからも、あくまでも大切なことは、「理性によって考察する」際にどうあるべきかで

あることが読み取れる。

天界気象の事象を扱った「ピュトクレス宛の手紙」では、「何より君が専念すべきは、始源や、無限性や、それらに類した事柄の研究、さらには判断基準や感情、そしてこれらをわれわれが考察する際の目的の研究なのです」(p.83)としたためており、自然について理解し、そのことを愛することの重要性は、それを研究する「目的を手に入れる」ことにつながると述べている。

「メノイケウス宛の手紙」では、より哲学に近づいて、欲望の種類や快樂や生き方について説いている。この手紙の最後には「それでは、君は、以上のことやこれらに類したことに、昼も夜も、君自身でも、また、君自身と同じ思いの人とも、励むようにしてください。そうすれば君は、目覚めているときも、眠っているときも、けっして心が乱されるようなことはなく、また人々のなかにあって神のごとく生きることになるでしょう。」(p.98)と結んでいる。

評者は正直なところ、原子や天界の事象や人の感情について、完璧に理解したわけではないが、この境地に達した先に見える平穏、アタラクシアはさぞ有意義なのだろうと感じた。広い草原にぽつんと建つ一軒家で、自分が生きていけるだけの広さの畑をしながら、賢い犬とともに暮らしている、ゆり椅子に座って思索にふける、そんなイメージである。そこで思い返されるのが、前節でも語られた、本書を通じて立ち上がってくるエピクロスの人情味あふれる生き方である。評者がイメージしたアタラクシアの印象と、本書を通じて訳者らが提示する、「友情による安全こそ、最も完全なもの」(p.160)として、感情に富んだ人々との交流を大切にするエピクロスの生き方にはギャップがあるように思われる。

ここから評者は、アタラクシアに到達するかどうかよりも、そこに至るまでに議論を交わしたり時にぶつかり合ったりすることが人生を豊かにする本質なのではないだろうか、と受け取った。この、侃侃諤諤と意見を交わす場があることの大切さに思い至ったとき、評者が参加している、中越地震から20年の復興を検証する研究会での議論が思い起こされた。この研究会において、中越地震が本当に地域のために思った復興ができたその要因には、誰かからの教えに従ったからというよりも、住民同士で議論できる場があったからではないか、という意見が印象に残っている。これはまさに、人口減少が進む中でも被災者主体での復興を進められた中越地域が、意図せず

してエピクロスの生き方をなぞるように復興に取り組んだと言えるのではないだろうか。混乱の世の中でも、そのような「場」が存在していたという、ある種の豊かさがエピクロスの思想を深める土台となっていたことは間違いないだろう。思索に耽り議論し、時に対立し友情を育める「場」を我々は維持できているだろうか。

5. おわりに

現代において改めてエピクロスの著作を読む意義は何であろうか。本書ではエピクロスの一次資料が中心的な内容であり、当時の時代背景、例えば奴隷制度や女性の位置づけなどについての記述はほとんどなく、別途学ぶ必要がある。その点を留意した上で、エピクロスの言葉からは、際限のない欲望を追求することや、やみくもな成長主義を見直す視点を得ることができるだろう。友情に最高の価値を置く考え方からは、共生や信頼を学び、自己中心的、孤立的考え方を反省することもできる。

エピクロスが「カオスは何から生まれたのか」という最初の問いを立てたのは、サモス島時代の 14 歳であった。ここで重要なことは、エピクロスが他者に対してまずは自分の疑問を投げかけてみたということではないだろうか。本書における訳者らの姿勢は、エピクロスの哲学についての「正しい理解」を提供するのではなく、一次資料を丁寧に提示することで読者自身に考えることを促しているようである。評者らの専門とするグループ・ダイナミックスにおいては、何が「快樂」となるかは、集団の中で関係規定的に変化するものと捉える。評者らは、本書を通じてエピクロスと対話し、またエピクロスがどんな人物であったのか、何を伝えようとしていたのかについて、大いに意見を交わすことができた。2300 年を経てもなお、本書を「新刊」として読む意義はそこにあるといえる。



図1 エピクロスの故郷ギリシャ・サモス島（2025年9月26日評者ら撮影）

ここで出会った日本人女性によると、サモスは「すぐにうわさが回る小さい島」だそうだ。自然豊かで人々の交流が盛んな小さな町—中越地域とも重ね合わされる、人情味あふれるこの地がエピクロスの生き方に影響を与えていたかもしれない。

注

(1) 『自然についての他』からの引用は、引用箇所の上に頁数を記す。

参考文献

三島 由紀夫 1983『葉隠入門』新潮文庫。
澁澤 龍彦 1993『快樂主義の哲学』河出書房新社。